// 巻　頭　言 //

社会福祉法人日本ライトハウス
視覚障害リハビリテーションセンター副所長　　嶋田　彰

忘れてはならない光景

令和5年も終わろうとしている。毎年のことではあるが、この12月になるとやり残した諸々が脳裏を駆け巡る。時間は容赦なく過ぎ去る。あらためて、その瞬間をその日を大切にしなければと思う。

これは私が寄稿した日本ライトハウス社内報『時報（11月号)』だ。少しでも多くの方々にこのような光景があったことを紹介しておきたい。常日頃、なにげに仕事をともにしてきた諸先輩たちの行動に、生意気な若造であった私は感銘を受け「これが僕たちの継承すべき仕事、役割だ」と使命を感じた瞬間であった。

◆◆◆

と記されている。

これは、私が以前から関わる大阪障害者雇用支援ネットワークが、障害者雇用支援月間である9月に『地下鉄美術館』として大阪市営地下鉄御堂筋線の一両編成を貸し切り、支援学校の学生さんの描いた絵画と共に展示した取り組みである。当時、私はひとりでも多くの障がいのある方々が企業就労できる社会を目指し現場で奮闘していた時期であったが、あの光景は今でも忘れることができず熱い思いがよみがえる。そして最後は『＜心身機能の変調＝障害＞は、さまざまな＜生きにくさ＞を誘発します。その解消は、本人の努力や家族の責任によってではなく、社会全体で取り組む必要があります。あなたのご理解が共感・共振・共生の輪として拡がり、あなたの隣で障害がある人が堂々と働いています。そんな姿が当たり前になりますよう願っています』と締めくくられている。

私たち日本ライトハウスは100年の歴史を迎え、すでに新たな歴史を刻みはじめている。これからも障がいのある方々にとっても、それを支える社会にとっても意味のある存在でなければならない。そのためには自発的な社会福祉の創造を止めてはならず、常にメッセージの表明（覚悟）と事業の展開（行動）ができる集団でなければならない。

今日も私はそんなことを願いながら、法人本部前の紫色と青色のポスターに映るヘレンケラーさんを仰いでいる。まずは私自身があの忘れてはならない光景と熱い思いを失わないように。

◆◆◆